

Title	直接経験の観察と観察態度
Sub Title	
Author	横山, 松三郎(Yokoyama, Matsusaburo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1926
Jtitle	哲學 No.1 (1926. 10) ,p.189- 243
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000001-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

直接經驗の觀察と觀察態度

横山 松三郎

目次

感覺と屬性

實驗の計畫

(a) 實驗の目的、(b) 被験者、(c) 装置及び方法、(d) 手順、(e) 實驗の部門、(f) 刺戟
實驗の結果

一、豫備的態度(課問)が精神測定函數に及ぼす影響

二、内省報告の概観

(a) 主課問下の比較判断過程、(b) 反省的比較判断過程

總括

感覺と屬性

心理學の主たる任務は複雑なる心的過程を觀察して、それを構成する諸要素に分析するにありといふ所謂構成主義の見地にたつて斯學を研究せんとする者が、第一に解決して置かなくてはならぬ問題は、觀察し得る最も簡單なる心的要素即ち單位が如何なる性質のものであるかといふことである。三十年以前ヴントやキエルペはかゝる單位の一つを感覺に求め、そを知覺の構成要素であると考へた。⁽¹⁾ 彼等に従へば、感覺はそれ自身多數の屬性を保有してゐるが、然も尙、それ以上單純なる過程に還元し得ない心的要素であつた。併し乍ら、この定義は一面に於て論理的矛盾を包含してゐるので、屢々攻撃の的となつた。「若し感覺が究極的要素であるならば、吾人は單にその存在或はその進行を指示 (anzeigen) し得るのみで、それを描叙 (beschreiben) することは全然不可能である。それ以上分析し得ないといふことは、一つ以上の方面——屬性——をもたないといふこと、即ちそれ以上細密に叙し或は形容し得ないといふことでなくてはならない。反對に、若し感覺が種々な

る屬性をもち、そしてそれ等を通して描叙し得る程複雑な過程であるならば、感覺は當然、要素として取扱はる可き性質のものではなく、却つて屬性こそその名稱を冠せらる可き正當なる權利をもつてゐるといはねばならない。」といふのが難者の論旨であつた。

ヅントの感覺概念に於けるこのような難點は、それが單に論理的、或は形式的、難點であるといふ理由で黙殺し得べきわけのものではない。果然、幾多の學者は進んでこの係争の渦中に投じ、その解決に努力した。

トルボット⁽²⁾（千八百九十五年）は、ヅントの定義を支持して感覺は一見複雑のよう
に思はるるけれども、尙、心的要素と看做さるる理由があるといつた。その主張は
かうである。心理學的分析の方法には二種ある。第一の手續きに於て、吾人は先
づ、最初に與へられたる心的過程を、より簡單なる過程に分析し、それによつて前者
を説明し、次にその比較的簡單なる過程を更にそれ以上簡單なるものに分析して
行くのである。而して、最後に到達したる最も單純なる過程をば吾人は心的要素
と名づける。感覺は實に斯くの如き手續きによつて得た究極的要素なのである。

併し、吾人の分析は複雑より簡單にいたる一方向のみに進行するのではない。吾人は第一の手續きによつて得たる心的要素を更に第二の手續きによつて分析して、それ特有の諸方面を決定しなくてはならない。強度とか性質とかいふような所謂屬性なるものは即ちその結果である。されば屬性を以て要素と稱ぶことは出来ない。何者、それは單に要素の特性に過ぎないのであつて、それを決定する手續きは第一の手續きの繼續ではなく、全然異つた方法であるからである。

コルキンズ⁽³⁾(千八百九十九年)は右の説を批評して、假令、トルポットの主張する如く感覺と性質及び強度とが各相異なつた分析方法によつて得たる結果であるとしても、後者を屬性といはずに要素であるといひ得ない理由はない。兎に角、第二の分析手續きが「第一の手續き」とは全然區別せらる可きであるといふ假定には何等の根據がない。多分トルポットは誤つた類比推理によつて、心的要素を化學的要素とか分子とかいふようなものと比較して考へてゐるのであらう。成る程、元素や分子は重さ、色、形、臭等の屬性をもつてゐる。が、よく考へて見れば、これ等の屬性は皆、物理化學的といふよりは寧ろ心的屬性である。而して、物理化學的には元

素も分子も共に不可分的のものであるから、要素といふも差支へないが、感覺の如き心理學的方法によつて幾多の屬性に分析し得るものを要素と稱することは論理的に不可能である。と論じ、屬性を要素として認められた。

この相反する見解を統一せんと試みたのはワツシバーン⁽⁴⁾(千九百〇二—三年)であつた。女史はトルボットによつて暗示された二つの分析方法に明確なる定義を與へ、感覺及び屬性の概念の基準を明示した。それによれば、純心理學的方法には判然と區別し得べき二つの分析法がある。第一の方法に於ては、獨立的變異性をもつてゐる結果、他の心的現象と別々に觀察し得るといふ意味で最も單純なりと考へらるる心的現象を以て究極的要素と爲し、第二の方法に於ては、他の心的現象と隔離して經驗し得る結果、それと別々に觀察し得るといふ意味で最も單純なりと考へらるる心的現象を以て究極的要素と爲す。即ちコルキンズの要素の概念は第一の方法より、トルボットやヴントの概念は第二の方法より生ずるといふのである。

ワツシバーンの影響をうけて、一時感覺は心理的否寧る觀察的單位、屬性は記述

的即ち論理的單位と看做さるるようになった。併し乍ら、かかる解釋が心的事實の説明として不十分な事はいふ迄もない。已にボーリング⁽⁵⁾が指摘したるが如く心理の實驗に於て、被験者が一種の豫向 (predisposition) を以て刺戟に接するといふことは、極めて普通なことである。永い間、この事實は暗黙の中に認められ、心理的觀察には避く可からざるものと考へられてゐた。而して、ミューラー及びシユーマ⁽⁶⁾ン、マーティン及びミユラー⁽⁷⁾、スクリップチユアー⁽⁸⁾、更に、ヅェルツブルヒ學派のアッハ⁽⁹⁾や、ウオット等⁽¹⁰⁾を経て、所謂 *Einstellung, Determinierende Tendenz, Aufgabe* 即ち豫備的態度或はそれを透導する課問の名によつて、豫向は實驗條件の重要な一要素として研究され始めた。殊に、キユルペ⁽¹¹⁾が抽象作用の實驗に於て、ある特殊の課問の下に於ては、感覺の屬性の全部は同時に觀察なし得ないことを證明(?)して以來、感覺及び屬性に關する傳統的概念は再び新たなる立場から考察せらる可き運命におちいつたのである。

キユルペは赤、綠、莖、及び黒或は灰にて色づけられた四種の無意味の綴字を八分の一秒間露出し、一定の指圖の下に、被験者をして觀察せしめた。指圖は(一)知覺し

得る文字の數を觀察する事、(二)刺戟の色彩とその位置を觀察すること、(三)綴字が作る形を觀察する事、(四)能ふ限り多くの文字とその相對的位置を觀察する事、及び(五)單に刺戟を觀察する事等の五種であつた。この實驗の結果の中で最も注目すべきことは、被験者の意識内容が課問の差異によつて變化することであつた。極端な例を擧ぐれば、第三の指圖をうけて被験者が形に對する豫備的態度をとつた時には、色彩や個々の文字について何等報告し得なかつたことである。被験者が注意を向けようとしなかつた方面(刺戟の)は露出時間が経過すると直に忘却せられ、或は、露出時間中に於てさへ全然知覺されなかつた。これ等の事實からキニルベは次のような説をたてた。異なつた課問の結果として生ずる被験者の意識内容の差異は感覺の差異ではなく、むしろ、彼の把捉様式 (Auffassungsweise) の差異である。然るに、一方、科學としての心理學は感覺が一定の屬性によつて組成せられてゐることを認容してゐるから、吾人は結局、心的過程とそれを意識することとを區別しなくてはならない。而して、この實驗に於ての心的過程は觀察の基礎となる感覺であつて、それは「心的實在」として、實際に知覺された方面、即ち「現實的意識」と對立

させて假定しておかねばならない。

ラーン⁽¹²⁾(千九百十三年)は右のような考へ方は古い内官説への復歸を意味するものとして批難した。キェルペがいふ「心的實在」としての感覺は感官の生理的興奮と同じものである。生理學的名辭を借りていふならば、異なつた把捉様式は末稍機官の活動及び多分大脳皮質にいたる興奮傳達の上に何等影響を與へないといふことになる。併し、意識の内容の變化に何等關與せざる感覺は意識的感覺といはれない。假令それが構成心理學が指定せる總ての屬性を有つてゐても、然も尙それは意識過程の中に現存してゐないのである。意識といふものは感覺の上に働く作用であり、而して、この作用をうけて始めて感覺は現實的意識となるのである。されば、感覺なるものは單なる生理學的組立であつて、神經興奮に伴ふ潜伏的内容の一つに過ぎない。と彼は論じた。

ラーンの説はテイチナー⁽¹³⁾(千九百十五年)の上に可成りの影響を與へたように見えるが併し、テイチナーは感覺即心的要素といふ考へを捨てはしなかつた。そのいふ處は大略かうである。感覺といふ言葉は分類學上の名辭であつて、それは幾

多の觀察を基礎として論理的に組立てられた概念である。抑々、心理學的觀察は二つの條件——刺戟及び觀察態度——に支配される。而して、感覺は刺戟に歸因し、屬性は態度に歸因するといへる。例へば、今假りに一つの視覺的刺戟をうけ、それが生起する感覺的内容を觀察するものとする。この場合、若し吾人がその色調に注意するならば、色調は直に明瞭に觀察される。次にその飽和の度に注目すならば、飽和の度が觀察され、更に態度をかへて、その明暗の度に注意を向けるなれば、明暗の度が觀察される。併し、如何なる態度を以てしても、視刺戟の下にては溫度や味を觀察することは出来ない。これ即ち、屬性が別々には觀察されるが、決して獨立しては存在し得ない證據であつて、吾人が心的事實を分類するに當つて、その基準を觀察態度に求めずして、却つて刺戟に求め、感覺を以て心的要素とする所以である。

以上記したところによつて、感覺及び屬性の心理學に於ける地位に關する文獻の全部をつくしたといふわけではないが、兎に角、その重なるものは網羅した心算りである。⁽¹⁴⁾ 要するに現代に於ける傳統的心理學者の多數は感覺を以て心的事實

の一單位としてゐるようである。感覺に包括せらるるすべての屬性は、これを同時に把握することは不可能である。従つて、全體としての感覺は幾多の觀察を経たる後、論理的に組立てられた概念ではあるが、然も尙、それは刺戟の直接的而して決定的フアンクションであるといふ意味に於て心的要素であり、また、その屬性は觀察態度のフアンクションとして觀察的單位である。これが即ち、彼等の到達したる最後の斷案であるといへる。

斯くの如き見解が果して心理的に妥當であるか否かは、今日遽かに決定することは出来ない。殊に、論理的に構成したる概念に過ぎない感覺に心的要素なる名稱を與へることは、余の深く疑問とするところである。併し乍ら、一面からみれば、感覺的内容——官能的直接經驗——が刺戟のフアンクションであり、また、屬性が觀察態度のフアンクションであるといふことは認められる。而して、若し、かく認むることが大なる誤りでないならば、その當然の歸結として官能的直接經驗と觀察態度との關係如何といふ問題が生起する。即ち、觀察態度が直接經驗及びその觀察を如何なる程度迄規定するかといふことである。更に、語をかへていふならば

若し観察者が單に一個の屬性をのみ觀察せんとする豫備的態度をとつて刺戟に直面したる時、彼は單に彼が目指した一屬性のみしか經驗し且觀察し得ないであらうか、或は、反對に他の屬性をも併せて經驗し且觀察し得るであらうかといふこととなる。ここに報告しようとする實驗は實に、かゝる疑問を解決せん爲の小さき努力に外ならない。

附記。已に紹介したキユルベの抽象作用についての實驗結果は本問題の解決に多少參考にはなるが、彼が用ひた刺戟はあまりに複雑に過ぎるから、決定的解決の資料とすることは出来ない。

實驗の計畫

(a) 實驗の目的

本實驗は觀察態度が視覺的經驗及びその觀察の上に及ぼす影響を決定せんとの目的を以て、千九百二十年十月より千九百二十一年七月にいたる一學年間、米國クラーク大學心理學研究室に於て行つたものである。

(b) 被 験 者

實驗に参加せる被験者は心理學教授ドクター・イー・ヂー・ボーリング(B)、同夫人ドクター・エル・デイ・ボーリング(D)、講師ドクター・シー・シー・プラット(P)及び同夫人ドクター・エム・ビー・プラット(M)の四氏にして、皆内省法に熟達せる心理學者である。

(c) 装 置 及 び 方 法

全實驗を通じて定量刺戟法を用ひた。といふのは、この方法は内省報告を調査する場合好参考となる數量的資料を提供すると共に、被験者の觀察態度を確立するに最も好都合な條件を具備してゐるからである。即ち、差閾附近の刺戟を判断することは非常に困難で、最も緊張した注意の集中を要し、且、刺戟の露出及びその判断が連続的に繰り返さるゝといふことは被験者の態度を統一ならしむる機能をもつてゐる。

被験者の注意を緊張せしめ、同時にまた、その経験内容を出来るだけ簡単にする爲めに、刺戟の露出時間を最小限度に短縮する必要があつた故、ドツヂ式に類似せる瞬間露出器を製作した。⁽¹⁵⁾ 同器の主要部は長さ五十糎、幅十二糎、高さ十五糎の長方形の暗箱である。その被験者に面する一端には中央に直径四糎ある圓形の覗孔を穿ち、その上には木製の覆(Hood)がつけられた。また、他の一端即ち實驗者の側には、各高さ〇・五糎、幅一糎ある二個の露出小孔が〇・三糎の距離をへだて、穿たれた。その左手(被験者から見て)の方の幅は螺旋式測微器によつて自由に長くも短くも爲し得る仕組になつてゐた。この端の左の角から斜に箱の側面に向つて四十五度の角度をなして、一枚の透明なる曇硝子が配置された。これは、その側面に穿つてある針孔から入り来る外部の光がこの硝子板の中心に反射し、その結果として一個の明るい凝視點を露出小孔の中間につくる爲めである。各、黒及び白よりなる大小二組の紙型は混色板上に組合され、その廻轉によつて生ずる一對の灰面——刺戟——は、それぞれ別々の露出孔に表示される。混色器は露出孔に接近して据付けられたから、被験者の眼に映ずる刺戟の大きさは露出孔のそれと殆ど同

様である。中央に高さ一糎、幅五糎の孔のある長さ二十五糎、幅十二糎の黒い厚紙によつて作られた滑走式開閉器^{スライディング・シッター}は露出孔の背後に、暗箱に密接して配置され、単一振子によつて操縦された。二個の露出孔及びその間の距離を加へた刺戟面の最大延長は二三八糎で、しかもそれは被験者の眼から五十糎離れてゐたから、最大視野の含む視角は二度四十四分であつた。

(d) 實驗の手續

實驗は暗室に於て行はれた。刺戟面は露出器の二十五糎上に吊された艶消球七十五ワット Q₂N 型マツダ晝光燭によつて一様に照らされた。被験者は暗い圍の中に座し、頭及び顔面の動搖を防ぐ爲、額を木製の覆にて支へ、バイティング・ステイツクを咬へて、視孔から凝視點を注視した。實驗者は毎回「Ready」の合圖を爲し、同時に發動機に電流を通じて混色器を廻轉させ、約二分經過したる後「No」といふ掛聲と共に振子の留をはなし、約十三シグマ間一對の刺戟を露出した。被験者は豫め課問（後段参照）によつて規定されたる觀察態度をとつて刺戟に對し、その比較

判断を下した。また時々実験者の要求に応じて、内省報告や反省報告を手記し、或は口授した。かくして、一回の実験時(一時間)に約一百の比較判断と、少くとも一つの内省または反省報告を得た。

(e) 実験の部門

全実験は二部門からなる。第一部に於ては、次のような意味の指圖が與へられた(原文はタイプラ
イターにて書す)

「貴方はよく見へる方の眼を覗孔にあて明るい點を凝視しなさい。NON」といふ合圖があつた後凝視點の兩側に二個の視覺的印象をもつでせう。貴方はその明暗の度にのみ注意しなさい。そして左の印象が右に比べて「より明るい」か「より暗い」か「または同じ」であるかを直に表明しなさい。

時々、貴方は明暗の度以外の屬性について報告するよう要求されるかも知れません。併し、決してそのような要求を豫期してはなりません。また明暗以外の屬性に注意を向けてもいけません。

貴君がこの指圖に従ふことが出来なかつた場合には必ずそのことを陳述しなさい。」以上。(明暗主課問)

かく、この部門に於ては、被験者は明暗の度に對して豫備的態度をとり觀察を繼續したのである。併し、時々、極めて不規則な時間的間隔をおいて、——但し約七回の露出に一回位の割合で——實驗者は不意に、刺戟露出の直後そして屢々被験者が明暗の判断を表明する前に副次的指圖(擴がり幅課問)を發して「その擴がりは何？」と問ふた。然る時には、被験者は左の印象が右に比べて「より大い」「かより小さい」「か、または「相等しい」かを反省的に判断しなくてはならないのである。

「明暗主課問」の下に實驗を行ふてゐる間は常に第一系列 A の刺戟を用ひたが、「擴がり副課問」を挿入した場合には第一系列 B の刺戟にかへた。刺戟は同じ一對が二度繼續して繰り返さるることを避けた外は、極めて不規則な順序によつて表示した。

第二部實驗に於ては、第一部と反對に被験者は主として「擴がり」にのみ注意を向け、その比較判断をした。而して明暗の度についての反省的判断は時々不意に要

求されたのである。「擴がり主課問」の形式は「明暗主課問」と同様であつて、只前者に於ては「明暗の度」といふかはりに「擴がり」といふ句が挿入され、「より、明るい」「より、暗い」「同じ」といふ句は「より、大い」「より、小さい」「相等しい」といふ句にかへられただけである。また、副次的指圖は「明暗の度は如何？」といふ明暗副課問にかへられた。

「擴がり主課問」下に實驗を行ふてゐる間は常に第二系列 A の刺戟を用ひたが、「明暗副課問」を挿入した場合には第二系列 B の刺戟にかへた。

兩部門とも、内省報告或は反省報告を要求した場合には「Ready」の合圖の前に口頭にて其旨を傳へた。

(f) 刺 戟

練習實驗中、明暗の度の反應に可成りの個人差がある事を發見したる爲、それに対する刺戟系列は被験者によつてかへることにした。また、副課問下にて「擴がり比較判断を下すことは非常に困難のよう」にみへたから、それには相互の間隔を増大したる比較刺戟系列を用ひた。尙、被験者 D の第一系列 A に於ける比較刺戟の

數が他より少ないこと、及び一般に副課問下の實驗に用ひた比較刺戟の數が主課問下のそれより少ないことは、單に便宜上そうしたので、別に深い理由があつたのではない。左に本實驗にて採用した刺戟の一覽表を掲げる。

第一系列 A (第一部實驗に於て主課問下の明暗比較判斷に用ふ)

被験者	比	B	D	P及M
比 (黒の百分比) 刺戟	戟	75	70	71
		76	72	72
		77	74	73
		78	76	74
		79	78	75
		80		76
		81		77

(比較刺戟はすべて黒及白の混合よりなる灰にして上記の數字は黒のパーセント、白をパーセントを表すものなり。標準刺戟は黒75パーセント、白25パーセントの混合。各刺戟の面積は高さ五耗、幅十耗)。

第一系列 B (第一部實驗に於て副課問下の擴がり反省比較判斷に用ふ)

全被験者	比
9.2	比 (幅を耗にて表す) 比較刺戟
9.6	
10.0	
10.4	
10.8	

(比較刺戟はすべて高さ五耗にして、上記の數字は幅を耗にて表すものなり。標準刺戟の面積は高さ五耗、幅十耗。各刺戟は黒75パーセント、白25パーセントの混

合よりなる灰^a。

第二系列 A (第二部實驗に於て主課間下の擴がり比較判斷に用ふ)

全者被	比較刺戟 (幅を耗にて表す)
9.4	
9.6	
9.8	
10.0	
10.2	
10.4	
10.6	

(すべて第一系列 B に準ず)

第二系列 B (第二部實驗に於て副課間下の明暗反省比較判斷に用ふ)

P 及 M	D	B	被験者 比較刺戟 黒の百分比
72	70	76	
73	72	77	
74	74	78	
75	76	79	
76	78	80	

(すべて第一系列 A に準ず)

以上。

實 驗 の 結 果

一、豫備的態度課問が精神測定函數に及す影響

前章に於て述べたる如き條件によつて行ひたる實驗は練習實驗及び不全實驗を除いて、總件數九千百に達した。即ち、銘々の被驗者は主課問下に、各一對の刺戟に對して百五十の比較判斷を下し、また副課問下に、各二十五の反省比較判斷を下したのである。更に細別すれば、Dを除く他の被驗者は各主課問の下に千五十の明暗比較判斷及び同數の擴がり比較判斷を爲し、副課問の下に明暗及び擴がりについで各百二十五の反省比較判斷を爲し、被驗者Dは主課問の下に、七百五十の明暗比較判斷と千五十の擴がり比較判斷を行ひ、副課問の下に、明暗及び擴がりについで各百二十五の反省比較判斷を下したことになる（刺戟系列参照）。

主課問及び副課問の下に各被驗者が下したる判斷の相對的度數——精神測定函數——は第一表及び第二表に掲載してある。第一表は第一部實驗に於て明暗

第一表 明暗比較判断の相対的度数

明=「より明るい」、同=「相同じ」、暗=「より暗い」、標準刺激=黒75%白25%の混合

被験者 判断	B						D						P						M						
	明		同		暗		明		同		暗		明		同		明		同		暗				
	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副			
70							74	80	19	16	7	4													
71								48				8		77			15		8		16	73			
72							56		25	44	19			69		21	20	10	10	24	59		13		
73								20	44	36		44		61		12	18	18	24	24	45		22		
74											31	44		51		26	36	23	28	24	29		22		
75	72		14							16		84		35		31	28	34	44	24	23		19		
76	61	60	20	32	14		10	0	18		72		17		27	24	56	56	14	12	14		11		
77	40	64	29	32	29			4		4		92		9		20		71		6	6		7		
78	31	36	23	48	46		0	4	5		95														
79	15	12	17	40	68																				
80	14	16	13	12	73																				
81	6		7		87																				
平均	34.1	37.6	17.6	32.8	48.3	29.6	33.0	30.4	22.2	23.2	44.8	46.4	45.6	43.2	23.0	24.0	31.4	32.8	35.6	35.2	15.7	28.0	48.7	36.8	

(黒、白百分比較)

載

第 二 表

擴がら比較判断の相對的度数

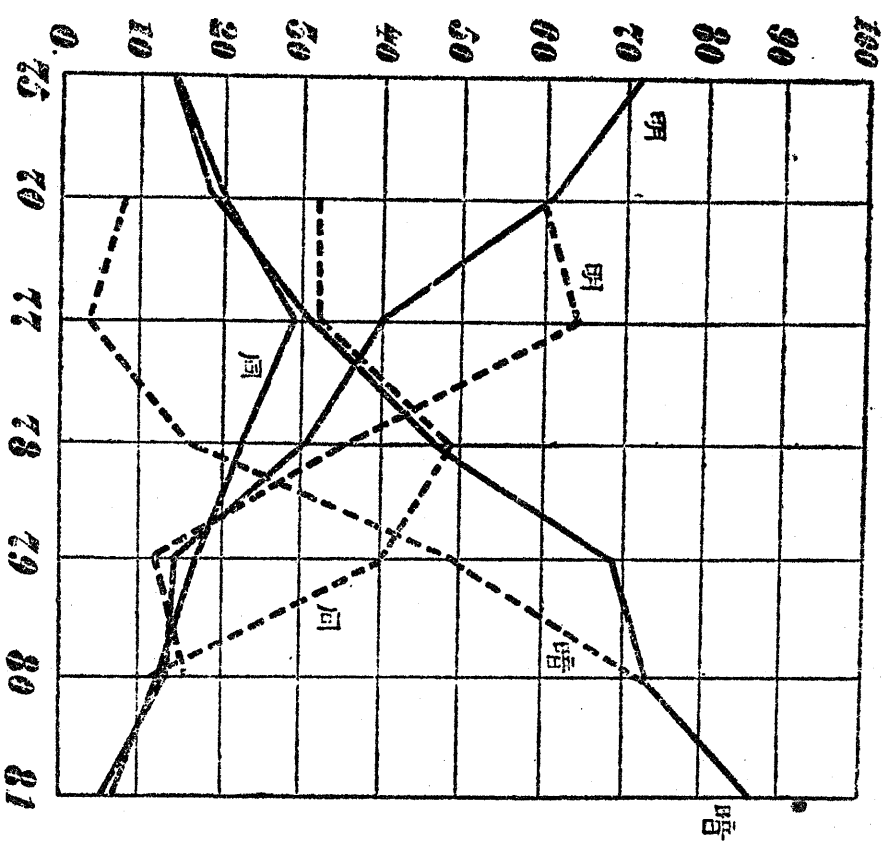
小=「より小さい」、等=「相等しい」、大=「より大きい」、標準刺戟=高さ5糸、幅10糸

被 験 者	B						D						P						M					
	小		等		大		小		等		大		小		等		大		小		等		大	
判 断 間	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副	主	副
9.2		72		24		4		40		56		4		76		20		4		76		20		4
9.4	71		26		3		83		14		3		79		17		4		87		11		2	
9.6	66	52	28	32	6	16	57	28	27	68	16	4	66	24	26	52	8	24	78	52	14	36	8	12
9.8	48		38		14		37		37	76	26	20	47	8	34	19	32	62	87	20	20	56	18	24
10.0	25	28	54	56	21	16	32	4	41	27	27	20	23	49	60	28	32	29	62	20	37	34	24	
10.2	17		40		43		21		25		54		14		31		55		27		27		46	
10.4	15	24	33	36	52	40	13	4	24	68	63	28	11	4	40	68	56	15	8	8	20	32	65	60
10.6	11		22		67		9		13		78		7		14		79		9		17		74	
10.8		8		36		56		0		60		40		4	12		84		9	4	16		80	
平均	36.1	36.8	34.4	36.8	29.4	26.4	36.0	15.2	25.9	65.6	38.1	19.2	35.3	23.2	27.4	36.8	40.0	43.9	32.0	20.9	32.0		35.3	36.0

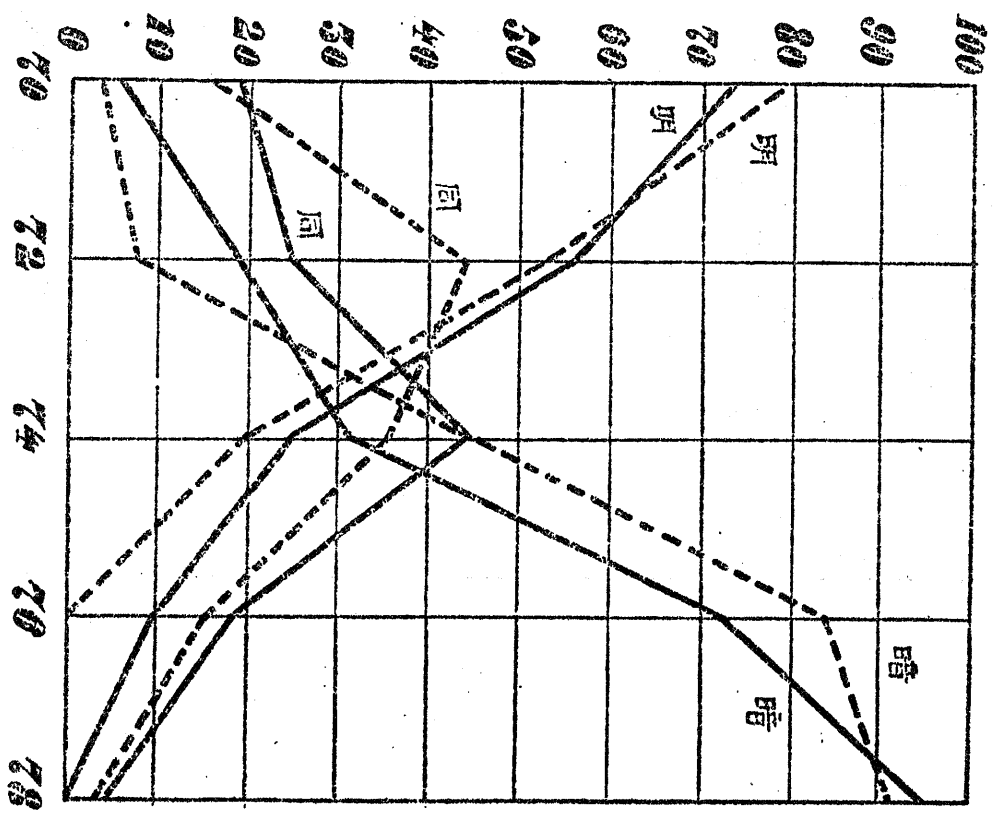
比 (幅を較べて表す) 刺戟

主課問の下にて行はれたる三種(より暗い、より明るい、同じ)の比較判断の相対的度数と、第二部実験に於て明暗副課問の下にて行はれたる、同じく三種の反省比較判断の相対的度数とを含み、第二表は第二部実験に於て擴がり主課問の下にて行はれたる三種(より大きい、より小さい、相等しい)の比較判断の相対的度数と、第一部實驗に於て擴がり副課問の下にて行はれたる同じく三種の反省比較判断の相対的度数とを含む。表は双方共同一の形式になつてゐる。即ち、向つて左の最初の行を除くの外、表はすべて四群に分かたれ、群は更に各二行よりなる三つの「組」に分かれてゐる。左第一行にある數は各比較刺激の指數であるが、他は皆相対的度数を示すものである。例へば、第一表の「B」群「暗組」主行にて「76」列にある數字「19」は第一部實驗に於て明暗主課問の下に、被験者Bが白二十五パーセント、黒七十五パーセントからなる灰色の標準刺激に對し、白二十四パーセント、黒七十六パーセントからなる灰色の比較刺激を「より暗い」と判断した度数を百分比にて表したものである。また、第二表の「D」群「小組」副行にて「9.6」列にある數字「28」は、第一部實驗に於て擴がり副課問の下に、被験者Dが高さ五耗幅十耗なる矩形の標準刺激に對し、高さ五耗幅九

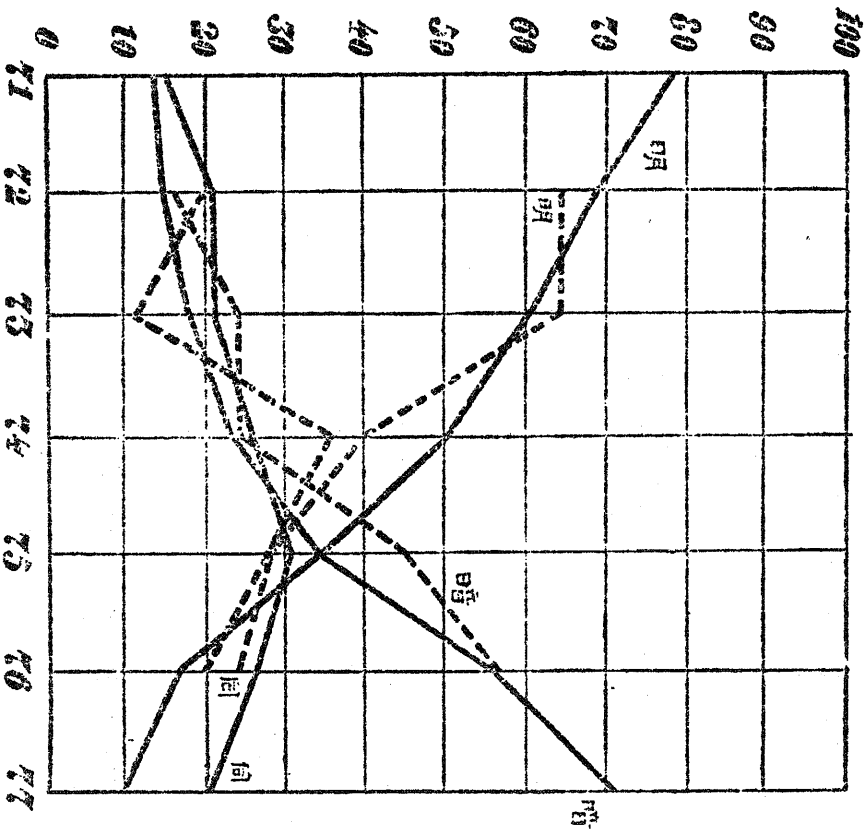
第一圖 明暗判断の相對的度數，被驗者 B



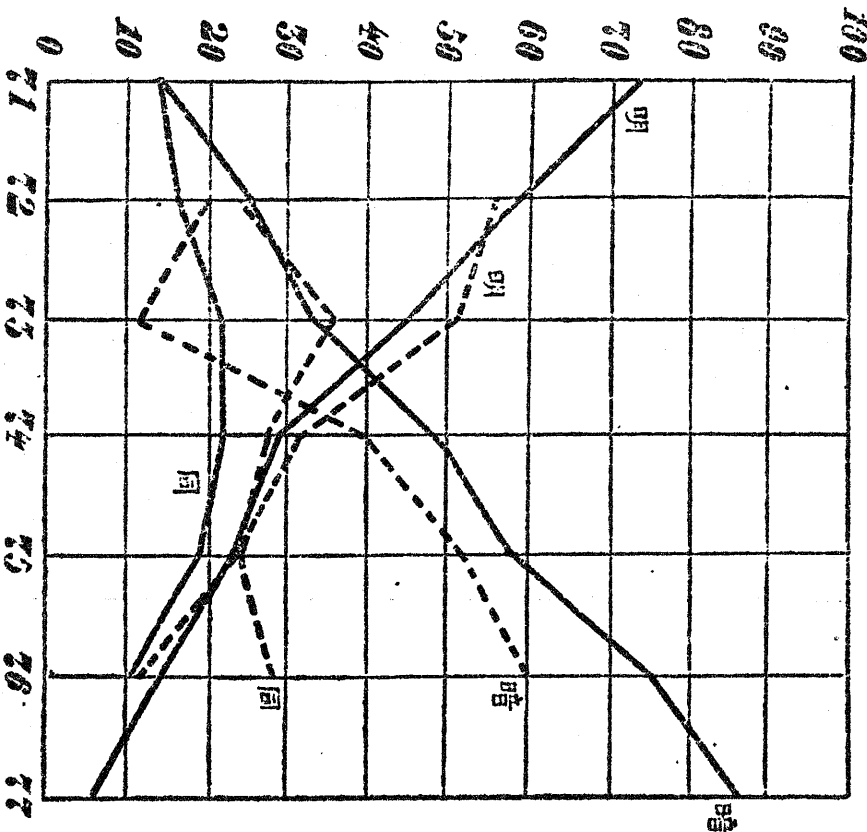
第二圖 明暗判断の相對的度數，被驗者 D



第三圖 明暗判断の相對的度數、被験者 P

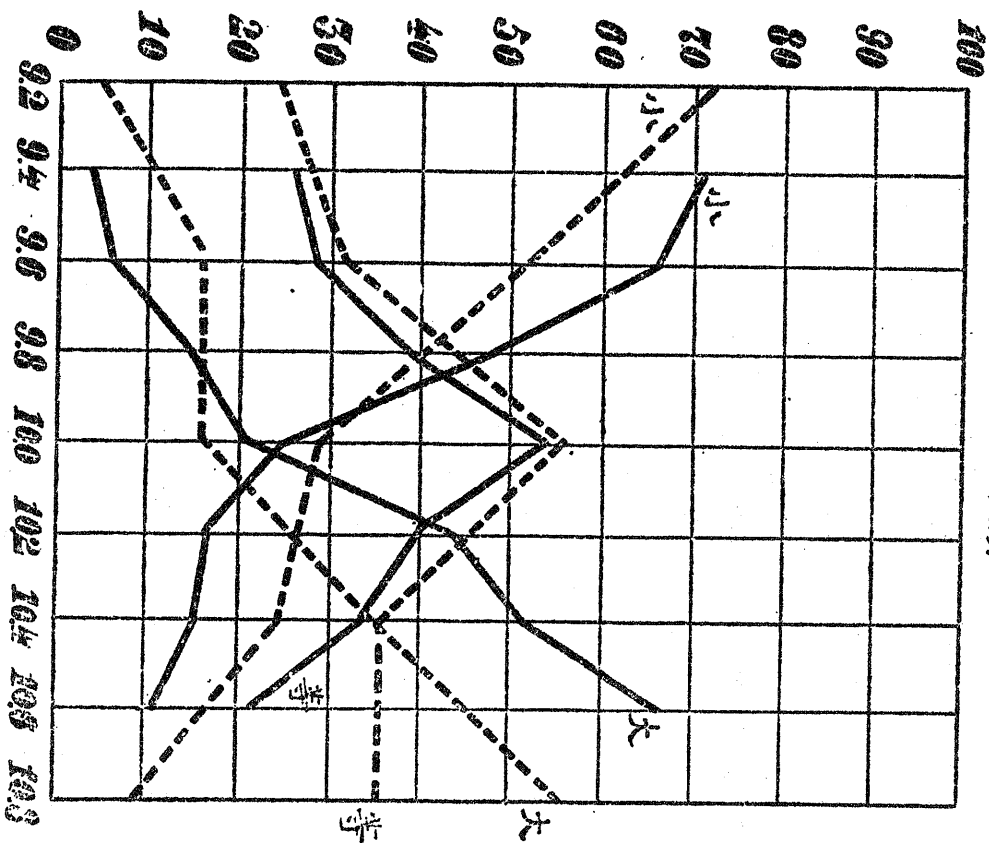


第四圖 明暗判断の相對的度數、被験者 M

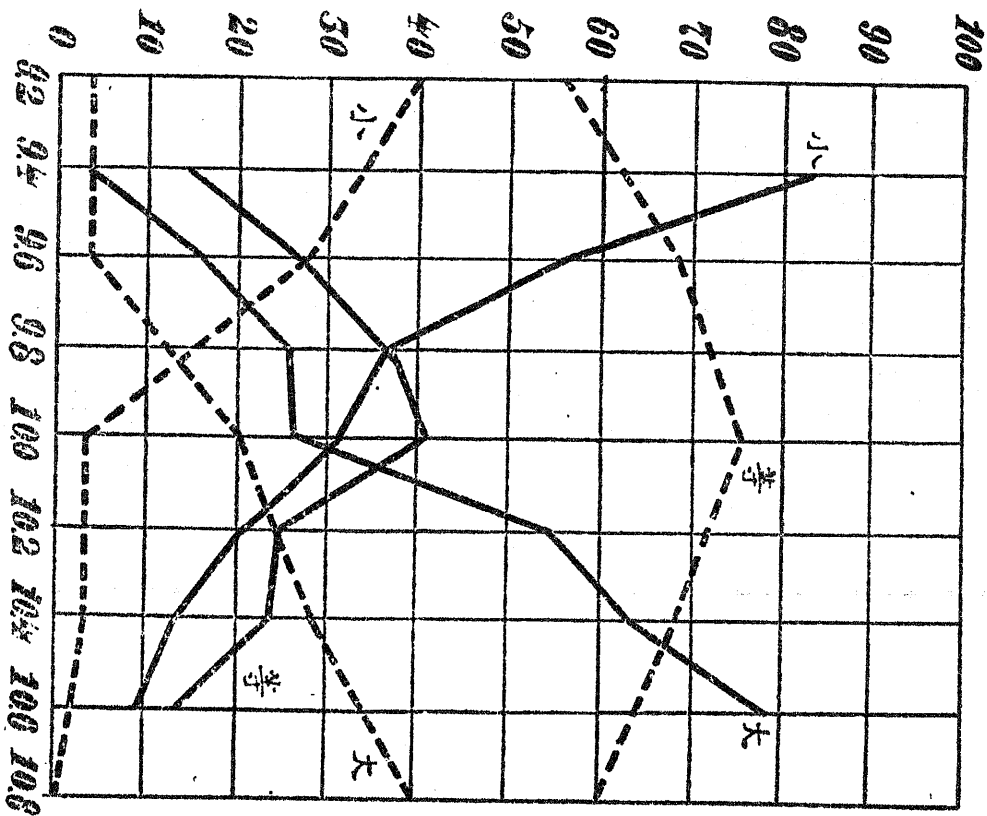


直接經驗の觀察と觀察態度

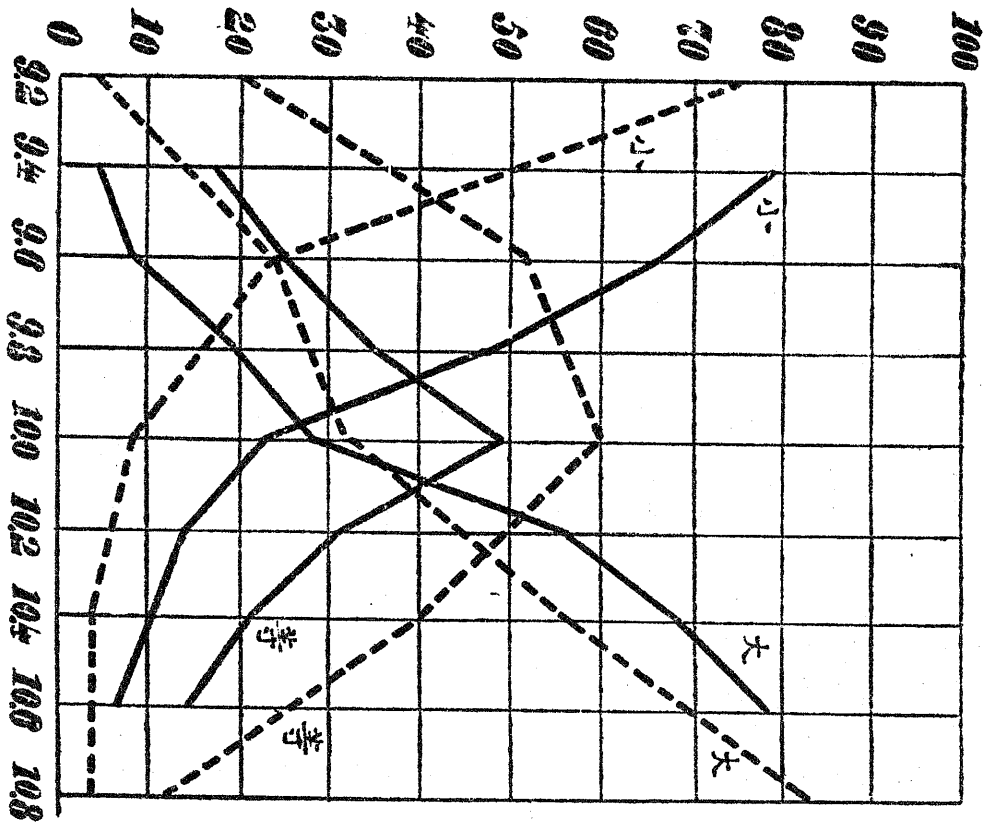
第五圖 擴がり判断の相對的度數、被験者 B



第六圖 擴がり判断の相對的度數、被験者 D

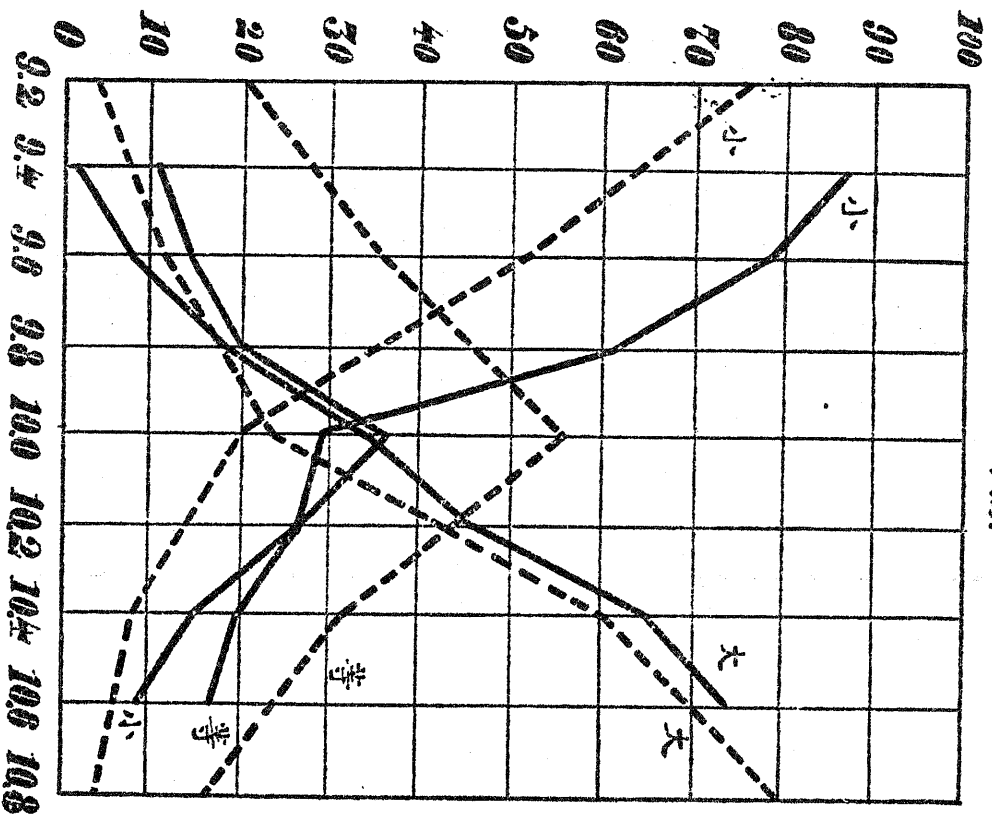


第七圖 擴がり判斷の相對的度數、被験者 P



直接經驗の觀察と觀察態度

第八圖 擴がり判斷の相對的度數、被験者 M



六耗なる矩形の比較刺戟を、より小さいと判断した度数を百分比にて表はしたものである。

觀察に便ならしむる爲、これ等の精神測定函數を圖式に表してみた。右に載せてある圖表はそれである。中、第一より第四迄の圖は第一表により、第五より第八迄の圖は第二表によつたのである。各圖に於て、比較刺戟の指數は横座標に、相對的度数は縦座標に指示されてゐる。

かく畫かれた曲線を見るに、たとへその中に少數のイムヴァージョンズがあるとはいへ、大體に於て $\psi(x)$ (ファイファンクション・オブ・ガンマ) と稱する公算曲線の型に該當するように思はれる。これは、主課問及び副課問の下にて得たる判断の分量的方面は、共に、最小次乘法によつて統計的に取扱ふことが出来るといふことを意味するのである。

併し、表や圖を精密に點檢すれば、各種判断の相對的度数の分配の有様は、課問が刺戟露出前に與へられたる場合(即ち主課問)と露出後に與へられたる場合(即ち副課問)によつて多少異なるといふことがわかる。殊に、明暗の度につていの「同じ」

といふ判断及び擴がりについての「相等し」といふ判断の相対的度數は、平均して主課問の時の方より副課問の時の方が遙かに多いことは注目に價する。

このような差異は、各精神測定函數に於ける諸常數——上下覺閾、不定閾及び主觀的對等點——の値を比較すれば、更に明瞭になる。第三及び第四表は即ち、それぞれ第一及び第二表から最小次乘法によつて計算して得たる、これ等常數の値を示すものである。(計算にはアーバン氏表を用ひた)⁽¹⁶⁾ 各表に於て、被験者の名は第一行に、そして課問の種類(主または副)は第二行に掲げてある。第三及び第四行には曲線の精度(h_1 及び h_2)第五及び第六行には上下覺閾(S_2 及び S_1)第七行には不定閾(I.U.)而して最後の行には主觀的對等點(S.E.)の値が記入してある。

附記。 h_1 及び h_2 は判断の精度を示すのではなく、單に曲線の勾配の緩急を示すに過ぎない。即ち h_1 及び h_2 の値が大なれば大なる程、それを含む曲線の勾配は急である。 S_1 及び S_2 の値はI.U.の値を規定する。I.U. (Interval of Uncertainty) $= S_2 - S_1$ 、これをI.U.はDL(差閾)の二倍である。而して、差閾の値は二個の刺戟の辨別に於ける感受性に反比例を爲す。故に間接にDLまたはI.U.は判断の精度と反比例すといふことが出来る。最後にS.E.は $h_1 h_2 S_1 S_2$ によつて規定される。

$$S.E. \text{ (Point of Subjective Equality)} = \frac{h_2 S_2 + h_1 S_1}{h_2 + h_1}$$

第 三 表

明暗判断曲線の精度係數、上下覺閾、不定閾及び主觀的對等點

(第一表に よ る)

精度係數(1) = 「より明るい」判断曲線の精度係數

精度係數(2) = 「より暗い」判断曲線の精度係數

標準刺激 = 黒 75% 白 25% の混合

被 験 者	課 間	精度係數 (1) h_1	精度係數 (2) h_2	下 覺 閾 S_1	上 覺 閾 S_2	不 定 閾 I.U.	對 等 點 S.E.
B	主	0.2526	0.2681	76.57	78.25	1.68	77.43
	副	0.2792	0.4079	77.09	79.19	2.10	78.33
D	主	0.2337	0.2638	72.14	74.50	2.36	73.40
	副	0.2402	0.3177	72.04	74.37	2.33	73.37
P	主	0.2414	0.2409	73.58	75.73	2.15	74.66
	副	0.2365	0.2047	73.43	75.66	2.23	74.46
M	主	0.2441	0.2493	72.68	74.11	1.43	73.40
	副	0.2372	0.2338	72.74	75.10	2.36	73.90
平 均	主	0.2410	0.2563			1.91	
	副	0.2483	0.2910			2.26	

第 四 表

擴がり判断曲線の精度係數、上下覺閾、不定閾及び主觀的對等點

(第二表に よる)

精度係數(1) = 「より小さい」判断曲線の精度係數
 精度係數(2) = 「より大きい」判断曲線の精度係數
 標準刺激 = 高さ 5 粒, 幅 10 粒

被 驗 者	課 問	精 度 係 數 (1) h_1	精 度 係 數 (2) h_2	下 覺 閾 S_1	上 覺 閾 S_2	不 定 閾 I.U.	對 等 點 S.E.
B	主	1.1850	1.3960	9.74	10.36	0.62	10.08
	副	0.8283	0.7869	9.65	10.67	1.02	10.15
D	主	1.2590	1.3464	9.75	10.20	0.45	9.99
	副	0.9900	0.7042	9.06	11.01	1.95	9.87
P	主	1.4560	1.5795	9.76	10.20	0.44	9.99
	副	1.1803	1.0645	9.39	10.23	0.84	9.79
M	主	1.5305	1.4938	9.91	10.24	0.33	10.07
	副	1.1795	1.2033	9.60	10.31	0.71	9.96
平 均	主	1.3576	1.4539			0.46	
	副	1.0445	0.9397			1.13	

先づ第三表(明暗比較判斷)について驗べて見よう。被驗者B及びDにあつては主課問下の「より明るい」或は「より暗い」の判斷曲線の精度は、副課問下のものより低い。(即ち勾配が緩い)。P及びMにあつては、この關係は逆になる。併しBを除外して考へれば、その差は甚小く、問題とするに足らない。B及びMの下覺闕及び上覺闕は副課問の場合より主課問の場合の方が小さく、従つて主觀的對等點の値も小さい。PやDは恰度その反對である。不定闕の値は、一般に主課問の時が副課問の時より小さい。殊にB及びMに於て、その傾向は顯著である。只、Dの場合は殆ど相等しい。而して全被驗者を平均すれば、不定闕の値は主課問下にて一九一耗、副課問下にて二・二六耗であつて、その差は〇・三五耗即ち、一九一の十八パーセントに當る。

擴がり比較判斷の結果第四表は、一樣に課問の影響を表してゐる。即ち、全被驗者を通じて、主課問下の判斷は副課問下の判斷より、曲線の精度高く、下覺闕の値は大きく上覺闕の値は小さく、従つて不定闕の値も甚小さい。實際、前者に於ける不定闕の平均値は、後者に於けるその二分の一に満たない位である。只、主觀的對

等點には大なる差異がないのみである。

以上、やゝ精密に観察し來つたるところを概括すれば次のようになる。

主課問の下に、瞬間的に與へらるる一對の視覺的印象について、單にその一屬性のみを觀察しその比較判断を爲すに充全なる豫備的態度をとつて刺戟に直面したる後——即ち刺戟の消滅後——直に第二の課問(副課問)を與へられ、全然豫期してゐなかつた他の一屬性について報告するよう命ぜられたる場合、被験者はその要求に應じて、反省的に比較判断を下すことが出来る。但し、その(副課問下の)判断は主課問の下にて爲されたる、同一屬性に對する判断と、假令、その相對的度数分配の形式は相似たりと雖、然も種々なる點に於て異なるところがある。殊に、前者に於ける不定調は後者に於けるより、その範圍が可成り廣い。即ち、擴がり判断に於ては約二倍、明暗判断に於ては十八パーセント大きい。これは、何を意味するかといへば、副課問下の判断の對象たる心的過程は主課問下の判断の對象たる心的過程より、その明瞭の度(Klarheit)及び分明の度(Schärfe)が幾分か低いといふ事である。

(不定調の定義参照)

併し、これ等の事實は、單に、全然注意を向けなかつた屬性についても、被験者はやや不精確ながら反省的に比較判断を下すことが出来るといふことを示すのみでその判断過程が主課問下の直接的判断過程と心理的に如何なる差異があるかといふことは明らかにしてゐない。實際、このような疑問は、更に各被験者の内省報告及び反省報告を調査して、始めて解決せらるるのである。

二、内省報告及び反省報告の概観

(a) 主課問下の直接的比較判断の過程

主課問下の實驗に於て各被験者より得たる内省報告の總數は七十七あつたが個別的に示せば第五表の如くなる。

今、その全部を此處に掲載することは、紙數の都合上一寸出來がたいから、單にその摘要を記述し、必要に應じて實例を擧げて説明する。

主課問下の明暗比較判断及び擴がり比較判断の過程或は方法には、各被験者共

第五表

總數	M	P	D	B	被験者	
					暗	明
39	8	10	10	11	暗	明
38	10	8	12	8	りが擴	

通な點が多い。即ち、實驗の前期（フォアペリオド）——用意の合圖があつてから刺戟が露出せらるる迄の期間——に於ける各被験者の意識内容は殆どすべて凝視點の知覺及びそれに必要な眼球、頭首、軀幹等の調整作用によつて生ずる有機及び運動感覺の集合から成立つてゐた。課問意識は多くの場合極めて不明瞭且斷片的で本實驗開始後數週を經過したる頃には、課問は殆ど無意識的に體得せられ、單に凝視點を注視することそれ自體がその受容（アクセンタンス）を意味すといふようなことは罕れではなかつた。

前期報告例（Pの例は課問意識が比較的明瞭な場合をとつた）

Observer B (Primary determination for tint): "Foreperiod-'Ready' to presentation. Almost contentless-remarkably so. Heard the 'ready' and the 'now' obscurely (I was already prepared since the sound of the starting motor is an initial signal). The clearest part of consciousness was the fixation point, bright on a dark field. With this, vague obscure kinaesthesia: a little eye-strain of fixation, a little bodily strain keeping head in position, a little other strain (altered

breathing) carrying the discomfort of the anticipated introspection. But there was really almost nothing at all. No explicit reference to instruction at all, no visual anticipation. No conscious set or reference to tint or any of the things I might have expected. An untrained observer might have said: "Consciousness a blank"

Observer D (Primary determination for extent): "Foreperiod was rather scanty in conscious process. General bodily posture of expectant attention. Aufgabe largely unconscious, but present in terms of eye-kinaesthesia of fixation. Slight strain from effort to secure best accommodation. Was certainly set to report upon extent, but no conscious process carried this set. (The performance has by now become rather mechanical)."

Observer P (Primary determination for extent): "Just previous to the 'ready' signal, complicated vocimotor and organic process which formed the structural basis of the taking up of an introspective attitude- somewhat as follows: rapid, telescoped repetition in vocimotor imagery of instructions accompanied by less clear visualization of the stimuli, clearing up of visual image of stimuli in which stimulus at left became slightly more extended, followed by vocimotor 'not

attend to other aspects', slight unpleasantness, rather acute organics about stomach, and general bodily strain. Following 'ready' signal the focal process in consciousness was perception of fixation point. Varying in clearness was visual imagery (accompanied by eye movement) of stimulus at left of fixation point. Perceptions of starting of motor, and 'now' signal were quite marginal, i.e., were not apperceived, were about on same level as general bodily tension.'

Observer M (Primary determination for extent): "Foreperiod-Visual perception of luminous spot in dark field, suggestions of lines converging towards it from the same plane as my eyes, kinaesthesia of eye movement struggling to keep the spot fixated. All this meant very vaguely that something was going to happen. No visual image, or anything like it, of the expected stimulus. Auditory perception of experimenter saying 'ready', 'now', and of the sound of motor coming as something rather extraneous to the visual experience."

附記、茲に注目すべきことは内省報告をする場合の被験者の豫備的態度は時間的にみて統一なものではないといふことである。即ち、被験者の豫備的態度には、明暗の

度或は擴がりのみの觀察を要求する主課問に應ずる豫備的態度と、全經驗を内省すべしと命ずる課問に應ずる豫備的態度とが含まれてゐたのである。勿論これ等二種の課問は同時的に受容れることは出来ない。何者、主課問に従ふといふことは單に一屬性のみ觀察せんとすること、内省するといふことは經驗を分析するといふことであるからである。そこで、結局、被験者は最初に主課問に要求された豫備的態度の下に一屬性を判断し、而して後、更に内省的態度をとつて順次連続的に、然も瞬間的に他の方面を觀察していつたのである。これはBの内省報告には明かに述べてあるが、他の被験者も口頭にて言明してゐる。

實驗の主期^{メインペリオド}——刺戟が露出されてより判断が表明せらるる迄の期間——に於ける意識内容は比較的複雑で、必しも主課問によつて規定せられたる屬性のみに止まらず、幾多の他の層性をも含むでゐた(これは前述の内省的態度の當然の歸結とみられる)。例へば、明暗主課問の下に、視覺の明暗の度が注意の對象として選ばれたる場合、被験者が該屬性を最も明確に知覺したことは勿論のことであるが、彼はまた、擴がり、大きさ、形、肌理等についても可成り明細に報告してゐる。

主期報告例(明暗主課問)

Observer B: "Darker, Very simple, immediate automatic judgement. Practically nothing there

but the perception, i. e., the sensory experience which issued automatically in the judgement. This sensory perception was of the two rectangles. Both were yellowish, the right more so. The left was darker in tint. Both were a little uneven in texture, as if a black cloud were spread over them. The edges were hazy, a little hazier in the right. The corners were also a bit rounded off, the upper right corner of the right stimulus was especially rounded and the rounding showed distinctly because the yellow was especially intense there. The two stimuli thus made up a complex spatial-qualitative pattern, which I cannot do descriptive justice to. The left was attentively clearer, and this clearness with the quality seemed to mean 'darker' at once."

Observer D: "The fixation point and black field were suddenly replaced by two luminous rectangles, (slightly yellowish, both very light, but the left lighter than the right), against black background. They were rather small patches, but decidedly intense. After a brief appearance they disappeared as abruptly as they had come. The judgment was automatic, and was touched off promptly. The tint (and the intensity of stimulation, which I find is closely involved with the tint) was the most prominent in consciousness. So far as I can recall, the rectangles were

identical in size, though size was not specially noted at the time. The clear-cut outline and the sharp contrast of the light rectangles with the background were fairly prominent. The whole consciousness was rather scanty."

Observer P: "With the presentation of stimuli, there came in focal perception of area immediately surrounding the position of fixation point. The perception continued in perseverative fashion after exposure and became much more extended, i.e., included both stimuli in toto. Within this after image there was slight eye movement, accompanied by shifts in focality of right versus left stimulus. The judgment followed quite automatically upon the perception, during the above mentioned shifts in focality, of the left stimulus as lighter. The visual impressions seemed to have a sort of yellowish hue, as against their stimuli which have a decidedly 'luminous' attribute. Awareness of this was quite irrelevant to judgment, however, I am sure. No awareness of grayish versus luminosity at this time."

Observer M: "Visual perception of two rectangular (very light) yellowish gray patches of same size but of different tint. The left was lighter, the only slightly lighter than the right. The

judgment, however, was given with much subjective assurance. The left besides being brighter had also a certain density or opaqueness. The right seemed more translucent, almost transparent. This meaning was given partly, I think, by the greater degree of yellow in the left, and partly, by a slight roughness in texture in the left not present in the right. The two perceptions came in very abruptly and went out in the same way."

同様に、擴がり主課問下の意識内容も亦、擴がりの外、明暗の度、形、肌理等を含むことが多かつた。

主 題 報 告 例 (擴がり主課問)

Observer B: " 'Greater', First the perception, which hung over into memory-after-image. Judgment issued out of the image. The two rectangles were clear, especially the contours marking the ends. The extent thus marked off for the left was about $1\frac{1}{2}$ the extent for the right. Both the right end lines were jagged. The left ends were straight. The filling in of the area of left rectangle was fairly clear: a fairly homogeneous yellow. The upper and lower boundaries were less clear, though I know they were on the same line for the two stimuli. The background and band

between the two stimuli scarcely existed, they were so obscure. The perception persisted with little change into the after-period and judgment came with an imaged eye-movement from one member to the other. (I used 'clear' for 'cognitively clear' or 'reportable'. I am not sure about the existential status of things that turn out not to be available for report. E. g. after the event I can not tell anything about the black band between the two rectangles. Was it there in consciousness or not? If there, obscure or clear? All I can say is that I cannot now make such a judgment of it as description requires.)"

Observer D: The stimuli came as two horizontal rectangles, separated by narrow black band, against black background. The left one was distinctly narrower than the right one, and the right one was conspicuously brighter. No chroma in the left one, which was a fairly light gray, the right one was perhaps slightly yellowish. Tint and extent came simultaneously, but only extent reached apperceptive level. There was an attitude largely made up of eye-kinesthesia and some organic sensations that carried this apperception of extent, judgment involved in it, and came automatically. After the report of 'less', came the verbal judgment, 'left one darker'. As

usual the upper part of the two rectangles, and the black upper boundaries were the most distinct part of the visual field."

Observer P: The 'blur' phenomenon was much briefer and less intense than usual: the visual field quickly took on clearness relations which made differentiation possible. The two visual impressions stood out very clear and intense. During the presentation proper the focal visual process included slightly more of the left than the right impression. The Aufgabe became more effective in terms of rapid shifts in clearness across the visual field, beginning during presentation and extending through the hang-over sensations. In the present instance no observable difference of extent was apparent between the two impressions, accompanied by increase in organics, and slight unpleasantness. Vocimotor 'equal' went out quite mechanically into verbalization of judgment equal. During the after-period, there was note-taking that right impression seemed a little darker."

Observer M: "Visual perception, coming all at once very abruptly, of two light gray rectangles of unequal length but of the same height. The left was immediately apprehended as slightly longer

than the right. During the last part of the experience after, and because, the judgment of extent had been made, the tint and general texture of the rectangles became clear. At the same time, however, throughout the experience I was still aware that my first impression of extent was correct- that is, the extent, and the relation between the two extents was fairly clear until the end of the presentation, although during the latter part tint took first place. I am sure that this attention to tint was not consciously determined."

第六及第七表は主課問によつて要求せられたる屬性以外の屬性にて直接刺戟に關係あるものが各被験者の内省報告に記述せられたる度数を示すものである。

第六表

明暗主課問下の内省報告に
明暗以外の屬性が記述せら
れたる度数。

内省報告 總數	屬性					被験者
	肌理	形度	強度	色度	擴がり	
11	7	9	4	11	7	B
10	0	9	7	5	1	D
8	1	1	5	1	7	P
10	7	10	3	8	9	M

第七表

擴がり主課問下の内省報告

に擴がり以外の屬性が記述

せられたる度数。

内省報告 總數	屬性					被験者
	肌理	形	強度	色度	明暗	
8	7	6	2	6	7	B
12	0	11	1	4	11	D
10	0	2	3	0	3	P
8	5	8	3	2	8	M

かく、實驗主期に於ける經驗内容は、多種多様なる分子によつて構成せられてゐるように報告されてゐるが、然も、指定の屬性に對する比較判断は、極めて迅速に行はれ、刺戟の知覺と同時に表明せらるゝのが常であつて、その漸消時迄延引せらるゝことは罕であつた。(前掲内省報告参照)

また、被験者Dを除く他の被験者は、總て第一次的基準によつて判断を下した。即ち、彼等は、明暗比較判断に於ては、主として現實に知覺したるところの明暗の度 (actually seen tint) を基準とし、擴がり比較判断に於ては現實に知覺したる擴がり

(actually seen extent) を基準とし、而して、刺戟の強度或は眼球運動に起因する感覺の如き副次的意識過程の媒介を借りるようなことは殆どなかつたといふことが出来る。只、被験者Dのみは例外で、多くの場合眼球運動感覺を基準として擴がり比較判斷を下した。

(b) 反省的比較判斷の過程

已に「實驗の手續」の項に於て述べたる如く、副課問は、主課問下の判斷が表明せらるる直前或は直後、即ち、刺戟が消滅したる後或はその漸消時に與へられたのであるから、一實驗に於て用意の合圖があつた時から副課問下の判斷が下さるる迄の期間の意識過程は甚複雑で、それを内省して綿密なる報告を爲すことは全く不可能事に屬する。されば、副課問下の判斷過程については、單に數回の反省的報告を、各被験者より得たのみである。併し乍ら、同一被験者の陳述は相互に一致した點が多いから、相當信賴し得るものである。

副課問下の判斷の基礎となつた意識過程は二種あつた。第一に副課問が刺戟

の消滅後に與へられたる時には、假令、被験者はその課問を直に體得し、それに應ずる新たな態度をとつても、判断の對象たるべき知覺が消え失せてゐるのであるから何等施すべき術がなく、止むを得ず、有意的に記憶心像として或は偽記憶心像として、原知覺を意識に復活させ、それを基礎として判断を行つたのである。故に、最後の判断が下さる迄には可成りの時間を要した。

第二に、刺戟の印象が未だ記憶残像として意識に残留してゐる中に、副課問が與へられたる場合には、被験者は直に、注意をこの残像に向け、要求せられた屬性を把握して判断した。勿論、このような場合でさへ、記憶残像によることが出來ず、新たに、記憶心像を喚起する必要にせまられたことがあつたのは事實である。

報告例

Memoranda On Judgment of Extent When Determined For Tint.

Observer B: "The generalizations about the secondary judgments of extent in the first series boil down to the conviction that I always had to make secondary judgment after getting determined for it and therefore on the basis of a memory image of the perception. The usual course

was something like this: 1. The sketchy bodily attitude meaning determination for tint; 2. the presentation itself; 3. an automatic issuing of the judgment of tint; 4. a very sketchy something that meant a determination for extent; 5. the becoming focal of the memory after-image or memory persistence of the perception; 6. the issuing of the judgment of extent. In other words, I felt sure that I was not sufficiently determined for extent until after exposure, and that I then had to get up the determination. I also felt sure that the determination could not get operative *ex post facto*, so that this late determination could not operate on the perception itself but had to operate on the memory of the perception as it hung over. When there was no memory the judgment failed. I was convinced that all determination was pre-determination."

Observer D: "When determined for tint, the experimenter's query as to extent resulted in a kinaesthetic-organic attitude in which eye kinaesthesia was especially prominent—all of which meant effort to revive the previous visual experience. Fixation of the region of the fixation-point would become especially rigid, and then there might come my pseudo-visual images (i. e. oculo-kinaesthetic substitutes for the appropriate visual images) of the previous visual experience.

Comparison would then be made in terms of eye-kinaesthesia. Then the report would be given in correspondence with the judgment made at this time. Often there was no successful pseudo-visual revival of the experience, or, if there was, it was too vague to supply a basis for judgment. In such cases the report was usually; 'same, I guess' or, 'failure'."

Observer P: "The only thing I can say about judgments on extent (when I was predetermined for tint) is that they were all made on the basis of rearousal in visual terms of the experience. The Aufgabe set up by the question 'How about extent?' was immediately operative on these arousals. Whether in the foreperiod there was some latent Aufgabe which facilitated the rearousal of the visual experience when questioned, is something I cannot say from observation."

Observer M: "I am surprised when the question, 'How about extent?' is asked, but can quickly call up an image of the stimuli, or else refer to the memory image of which, till the question was asked I have probably been unaware. This kind of judgment might be divided into A and B. A-voluntarily called up image, B-memory after-image. The latter gives a more

assured judgment.”

(明暗反省判断過程の報告は、擴がりのと大差がないから省略した)

附記。被験者Dは、往々、擴がりに對して豫備的態度をとつて、刺戟に直面したる場合に擴がりを知覺する以前或はそれと殆ど同時的に、明暗の度の差異を識別したといつてゐる。そして、このような場合に明暗の比較判断を要求する副課問が與へらるるならば、その記憶によつて直に明暗判断を報告することが出來ると附加してゐる。同様に、被験者Mは明暗に對して豫備的態度をとつた場合にも、擴がりの差異を明確に意識したことがあると述べてゐる。併し乍ら、彼等の内省報告を精密に調査して、右のような現象が必ず主課問下の豫備的態度が不完全な時、殊に副課問が直前の實驗に與へられた時に起ることが分明になつた。されば、これによつて前述の結論を覆へすものとは考へられない。

總 括

(一) 主課問の下に、瞬間的に與へらるる一對の視覺的印象について、單に、その一屬性のみを觀察し、その比較判断を爲すに充全なる豫備的態度をとつて刺戟に直面したる後——即ち刺戟の消滅後——直に第二の課問(副課問)を與へられ、全然注意を

向けてゐなかつた他の一屬性について報告するよう命ぜられたる場合、被験者はその要求に應じて、反省的に比較判断を下すことが出来る。但し、この「反省的」といふ言葉は單なる「回顧的」或は過去に逆つて原経験を直接對象として判断を行ふといふことを意味するのではなく、寧ろ、新なる態度の下にその記憶殘像或は記憶心像を對象として観察し判断することをいふのである。對象として観察し判断することはいふのである。即ち、一度過去つた経験を直接對象として、その一方面について判断することは如何なる場合に於ても不可能なことである。課問は決して過去の経験の上に直接作用しない、觀察態度は常に豫備的態度であるといはねばならない。かの主課問下の内省報告に幾多の屬性が記載されてあつたことも畢竟内省的——分析的——態度が豫備的態度の一部を爲してゐた結果に外ならぬ。

(二)併し、主課問下の直接経験内容が該課問によつて觀察を命じたる屬性以外の屬性の比較判断を觸發する根底とならぬといふことは、必ずしも、それが一屬性のみによつて構成せられてゐるといふことではない。然らずんば、かかる経験の記

憶殘像若くは記憶心像が他の屬性の判断の根底となり得なかつた筈である。また、その内容が内省によつて數種の屬性に分析されたことも、それが複雑な過程であつたことを證明してゐる。(前節で、内省的態度が豫備的態度の一部を爲してゐたといつたが、これは主課問下の豫備的態度と内省的態度が一つの複合體を形成してゐたといふのではなく、單に、被験者が主課問の豫備的態度によつて刺激の一屬性を判断し、次に内省的態度をとつて、それを分析的に觀察したといふことを指したのである。敢て誤解を防ぐ爲め繰り返していつて置く)。されば、主課問下の直接經驗内容には一つ以上の屬性が包括されていたと考へて差支へないと思ふ。

(三)是に因つて之を觀るに、豫備的觀察態度は直接經驗の内容を制限する何等の機能なく、只その把捉(Auffassung)に影響するのみであるといはなくてはならぬ。更に、これを廣義に解釋すれば、直接經驗は刺激の函數であり、而して、その内容に含まれたる各種屬性の把捉は觀察態度の機能であるといへる。蓋し、テイテナーが屬性は別々には觀察せらるるが、決して個々獨立して存在し得ないといつたのは右のようなことを意味したのであらう。スツムプ⁽¹⁷⁾は心的機能と現象との間には

密接なる關係あれども、兩者は獨立的に變異し、互に相影響せざるものなりと論じてゐるが、本實驗の結果は大體に於て、この説を支持するものと見做される。

(四)所謂反省的判斷は直接經驗の記憶殘像或は記憶心像を對象として行はるといつたが、これ等殘像及び心像と原經驗とは必ずしも分離してゐるとは限らない。殊に殘像と原經驗との間には何等時間的間隙はないのである。殘像や心像が副課問下の判斷の基礎となり得たこと、而して、その判斷の量的分配形式が主課問下の判斷(勿論同一の屬性についての)のそれと類似してゐたことは、彼等が原經驗とあまり相違してゐなかつたことを明示してゐる。只反省的判斷に於ける不定闕が直接判斷に於けるより大きかつたといふ事實は、彼等(殘像及び心像)が原經驗の、ありのままの延長ではなかつたといふことを暗示してゐるのみである。されば、判斷の根底となつた全經驗は時間的に推移する過程であつたといふことが出来る。が併し心理學的觀察の目的に於て、それが恰も固定したるものの如く作用した處から見れば——觀察の目的に従つてその各方面が把捉せらるる處から見れば——それは一種の心的對象物即ち時間的に積分されたる客觀的全體であると

考へてよい。而してこの「全體」がラーンの所謂潜伏的内容ではなく、飽く迄現象的——併し無規定な——過程であることは被験者の内省によつて明らかである。今、Bの言葉を借りていふならば「直接経験は直接経験であつて非経験ではない。私はそれを経験した時、それを経験したと知る。併し乍ら、それを描寫するには觀察的態度をとつて分析しなくてはならぬ」。分析以前の経験は單に「thatness」を持つのみである。(完)

註

- (1) W. Wundt, Grundzüge der Physiologischen Psychologie, 4te Aufl., I, 1893, 281; O. Kuelpe, Grundriss der Psychologie, 1893, 21.
- (2) E. B. Talbot, Philosophical Review, 1895, 4, 154-166.
- (3) M. W. Calkins, Psychological Review, 1899, 6, 506-514.
- (4) M. F. Washburn, Philosophical Review, 1902, 11, 445-462; Psychological Review, 1903, 10, 416-422.
- (5) F. G. Boring, American Journal of Psychology, 35, 1924, 301-304.
- (6) G. E. Miller und F. Schumann Arch. f. d. ges. Psychol., 14, 1889, 37 ff
- (7) L. J. Martin und G. E. Miller, Zur Analyse d. Unterschiedsempfindlichkeit, 1899.
- (8) E. W. Scripture, Philos. Stud. 7, 1892, 630-632.

- (9) N. Ach, Ueber die Willenstätigkeit und das Denken, 1905.
- (10) H. J. Watt, Arch. f. d. ges. Psychol., 4, 1905, 289-436.
- (11) O. Kuelpe, Bericht über den I. Kongress f. experiment. Psychol., 1904, 56 ff.
- (12) C. Rahn, Psychol. Monog., 1913, No. 67.
- (13) E. B. Titchener, Amer. Jour. Psychol., 26, 1915, 258-267.
- (14) 勿論,最近の Gestalt Theorie は省略した。本實驗は Gestalt Theorie とは全然獨立した立場から出發してゐる。
- Cf: K. Koffka, Psychol. Bull., 19, 1922, 531-585; M. Wertheimer, Psychol. Forsch., 1, 1922, 47-53;
R. M. Ogden, Amer. Jour. Psychol., 33, 1922, 247-254.
- (15) R. Dodge, Psychol. Bull., 4, 1907, 10-13.
- (16) F. M. Urban, Arch. f. d. ges. Psychol., 24, 1912, 236 ff.
- (17) C. Stumpf, Erscheinungen und psychische Functionen, 1907.